

## 博士論文要旨

### Battlefield as Purgatorial for the American Self: Tim O'Brien's Vindication of the Vietnam War Experience in *If I Die in a Combat Zone*, *Going After Cacciato* and *The Things They Carried*

煉獄としての戦場とアメリカ的自我の苦悩—『僕が戦場で死んだら』、『カチアートを追跡して』、『本当の戦争の話をして』におけるティム・オブライエンのヴェトナム戦争従軍についての弁明

熊本県立大学大学院文学研究科博士後期課程  
英語英米文学専攻 三牧史奈

Tim O'Brien (1946-)は、ヴェトナム戦争に纏わる自身のトラウマ体験を題材とした作品をこれまで数多く発表している。アメリカ人作家によるヴェトナム戦争小説といえ、まず初めに彼の名前を思い浮かべる読者も今日少なくない。実際、O'Brien は批評家からの高い評価と幅広い読者からの支持を獲得しており、アメリカ国内外で高い知名度を得ている。ただ、O'Brien によるヴェトナム戦争のトラウマ表現は、この戦争に纏わる未曾有の体験について語ろうと試行錯誤を繰り返してきた他の帰還兵出身の作家達のものとは一風異なった様相を呈しているように思われる。

O'Brien のヴェトナム戦争小説の最大の特徴は、作者自身の分身や投影ともいうべき、ユニークな登場人物達である。アメリカ中西部に位置するミネソタ州の出身で、白人中流階級の比較的裕福な家庭に生まれ育ち、第二次大戦後のアメリカ社会における著しい経済成長の下に物質的豊かさを享受した O'Brien は、初期のベビーブーマーであり、冷戦期中期までの文化的繁栄の時代の寵児である。O'Brien は、自身が生み出す登場人物達に、冷戦期に生きた自らの半生を幾度となく重ねてきた。それらの登場人物達は、冷戦期アメリカ社会や文化に対する批判的眼差しを交えつつ、自分達を取り巻く環境を感性豊かに捉えている。O'Brien の処女作 *If I Die in a Combat Zone* (1973) の中においては、ヴェトナム戦争を通して正真正銘の勇敢さとは何かという問題に真摯に向き合うようになった主人公 Tim O'Brien が、哲学、歴史学、政治学、文学等の知識に言及しつつ、未曾有の出来事に際して人はどのように対処すべきなのかという問題に関して内省の形で語る。また、ヴェトナムの混沌とした戦場から、文明と愛と自由の象徴であるヨーロッパの都パリまでの奇想天外な旅を空想し続ける *Going After Cacciato* (1978) の Paul Berlin は、自身が持つ驚くほど豊かな想像力を駆使して、彼にとってあり得たかもしれないもう一つの未来、つまり、従軍の義務を受け入れる選択とは異なる別の生き方について深く考察するようになる。すなわち、ヴェトナムの戦場とパリという、二つの別世界を頻繁に行き来する Berlin は、空想の旅を通して兵士としての自らの生の意義について自問し始めるのである。そして、*The Things They Carried* (1990) に登場する、ヴェトナム帰還兵出身の作家 Tim O'Brien は、ヴェトナム戦争終結からおおよそ 20 年の歳月を経てもなお、ヴェトナム戦争に纏わる「本当の戦争の話」を語ることに執着し続ける。彼が紡ぎ出す「本当の戦争の話」においては、記憶の片隅にとどまり続ける戦争の真実は、もはや想像の出来事と不可分のものとして提示される。*The Things They Carried* においては、兵士達のトラウマ体験は、それらの大部分が虚構化されることによって描き直されてゆくのだが、このことにより O'Brien は読み手の情感に訴えかける語りを得ており、この語りは登場人物達と読者との心理的距離を縮めることに成功している。*The Things They Carried* の O'Brien による「本当の

戦争の話」の狙いとは、おそらく、アメリカ軍事史上最も不名誉なベトナム戦争のトラウマの記憶が忘却の彼方へと消え去ってしまうことを防ぎ止めることなのである。*If I Die in a Combat Zone* の Tim O'Brien、*Going After Cacciato* の Paul Berlin、*The Things They Carried* の Tim O'Brien といった登場人物達は、多くの読者や批評家の心をつかむ不思議な魅力を備えているといえるが、この魅力こそ、作者としての O'Brien がベトナム戦争から多種多様な主題を発掘し、捉えどころのない戦争の本質をあぶりだすための不断の努力の結果なのだと考えることができる。そして彼の戦争に対する眼差しは、彼が生み出す登場人物達の個性の中にしっかりと反映されているのである。

本論文は、特に、O'Brien を含め彼の登場人物達はその豊かな創造性を発揮するまでのとあるいきさつに光を当てて、O'Brien の作品が持つ個性について読み直すことを目的とする。O'Brien 作品の登場人物達はみな共通して、彼ら自身にとっての「人生最大の選択」に直面し、ひどく思い悩む。それはまさに、O'Brien 自身がベトナムの戦場に赴く際に体験した出来事を想起させるものであり、間違っていると確信している戦争を戦うべきか否かというジレンマであった。そのジレンマはとりもなおさず、アメリカ人としての理想の自我形成における危機を意味している。この危機を巡る登場人物達の葛藤のプロセス、及び彼らの苦渋の決断を通じて、O'Brien の誤った「人生最大の選択」の結末はどのようなものとして描かれ、また、このベトナム戦争三部作においてどのように上書きされていくことになるのだろうか。本論文では、O'Brien のベトナム戦争表象において、アメリカ人としての理想の自我形成と危機、およびその再構築が、どのような精神的営みとして描かれているかを分析することで、その世界観と個性を捉え直す。結論として、本論文は、O'Brien の描くベトナム戦争のヴィジョンは、アメリカ人としての理想の自我の敗北のイメージと固く結びついていることを示唆する。

ベトナム戦争終結後、アメリカはベトナム戦争健忘症の時代である 70 年代から、ベトナム戦争再評価の時代である保守的な 80 年代を経て、90 年代新たに湾岸戦争へと介入してゆく。第二次大戦期以降、目まぐるしい変化に晒されてきたアメリカ社会において、ベトナム戦争小説という文学ジャンルは未だに発展途上なものとして置き去りにされたままであると言わざるを得ない。本論文は、読者が無意識に抱いている「戦勝者」としての肯定的なアメリカ人の自我イメージを O'Brien 作品が揺らがせ、さらにはこの自我の回復までの重大な苦悩について想像させていることを指摘する。このように、O'Brien が描くベトナム戦争の真実が、戦争文学研究という限定的な枠組みを大きく乗り越え、アメリカ社会や文化、そしてアメリカの大衆心理への理解という新たな展望を提示するものであることを、本論文では大いに強調したい。

第一章では *If I Die in a Combat Zone* を取り扱う。帰還兵出身の作家として特に 1980 年以降アメリカの文壇で高い知名度を獲得した O'Brien は、その実験的語り的手法により多くの関心を集めた作家だが、*If I Die in a Combat Zone* には、彼の戦争表象の原点ともいえる二つの要素を認めることができる。まず、事実と虚構とが頻繁に混交する語りの技巧、そして、主人公が戦争に纏わる善悪や勇敢さ等の道德・倫理的諸問題を実践的に思索し直す場としてベトナムの戦場が比喩的に描き出されているという点である。これまでの従来の研究の多くは、O'Brien の戦争表象について、ポストモダニズム的言語観や芸術観を通しての読解、あるいはトラウマ表象解釈、または戦争文学作品全般との比較研究などの文脈に O'Brien の作品を位置づけることによって、作品解釈を試みてきたように思われる。だが、これらの従来の批評が、O'Brien 作品が本来持つ多義性を十分に考慮できているとは断言し難い。というのも、まずなにより、不正義であると確信する戦争に主人公が不本意ながらも従軍するといういきさつが秘める重

要性について徹底した議論が抜け落ちているからである。このいきさつこそ O'Brien が描く主人公達のその後の戦争体験をより複雑で困難なものにしているのであり、また、O'Brien 自身が作中世界を豊かに展開させてゆく原動力ともなっている重要な問題なのである。本稿では、主人公が不正義の戦争に従軍することを決心するまでの葛藤の過程に主に焦点を当てる。アメリカにとっての「正しい戦争」の歴史によって形成され、その後長く伝承されてきた伝統的なアメリカン・ヒロイズムに象徴されるようなアメリカ人としての肯定的な自我意識を自らのアイデンティティの確固たる基盤として据える主人公は、アメリカのヴェトナム戦争介入に不条理を見出すが、社会的責務の念からこの戦争への従軍を強いられてしまう。だが、これをきっかけに、彼が内在化していたアメリカ人としての理想の自我イメージは破綻し、それを盲信していた自分自身のアイデンティティさえも揺らぎ始める。不正義のヴェトナム戦争への従軍を通してアイデンティティの危機に直面した主人公であるが、その後の戦争体験は、その再構築を巡る葛藤が投影されたものとして描かれている。

このように、*If I Die in a Combat Zone* において、主人公は一貫してヴェトナム戦争を不正義の戦争として捉えており、最終的に従軍を決めた自分のことを「臆病者」とみなしている。ヴェトナム戦争従軍を否定的に捉え、自らを臆病者とする自己評価は、本論文で取り上げる他の二作品にも引き継がれることとなる。

O'Brien の自我を巡る葛藤は、ヴェトナム戦争が泥沼化しつつあった 60 年代後半におけるアメリカ社会の世論の分裂を想起させるものである。本作品発表当時、アメリカはヴェトナム・シンドロームと呼ばれる、ヴェトナム戦争健忘症の時代を迎えていた。忘却こそヴェトナム戦争から被ったトラウマの時代をサバイバルするための必須の手段であるとみなしていた大衆にとってしてみれば、本作品における O'Brien の「ジレンマ」は、彼ら自身に対して突き付けられた強烈なアンチテーゼとして心に響いたといえるだろう。

第二章は *Going After Cacciato* を取り扱う。ヴェトナム戦争従軍を巡る「ジレンマ」によって引き裂かれた自我の苦悩は、本作品において、更に複雑な様相を呈する世界観へと発展しており、深く掘り下げられてゆくこととなる。

主人公 Paul Berlin は、ゲリラ戦が繰り広げられる過酷なヴェトナムの戦場を生き抜く中で、同じ部隊に所属する Cacciato という風変わりな兵士がある日突然パリを目指して戦場から逃亡するという事件に遭遇する。この事件をきっかけに、Berlin は仲間の兵士達と協力して、Cacciato を連れ戻すという新たな任務を果たすため、ヴェトナムからパリまでの果てしない冒険の旅を空想する。しかし、Cacciato を連れ戻すというのは Berlin による単なる言い訳で、彼がパリへの旅の空想世界に没頭するのは、戦場の過酷な状況からの現実逃避を望んでいるからなのである。作品では、Berlin の記憶を語る章、Berlin の創作行為を明るみに出す“Observation Post”と呼ばれるメタフィクショナルな章、そして、パリまでの冒険譚である“Road to Paris”と呼ばれる章の三種類のナラティブが複雑に交錯し合うことで、Berlin の思考の流れを詳細に辿っている。作品終盤で、Berlin は自身の想像力に限界を感じ、冒険譚を放棄した後、戦場に再び生きることを選択する。

Berlin はこの空想世界の中に、ヴェトナムの故郷を追われて難民として生きる Sarkin Aung Wan という娘を登場させ、旅に同行させている。Berlin は自らのイメージーションの力によって作り出したこの Sarkin という娘と恋に落ちるが、この娘は Berlin のオルター・エゴ的存在、つまり、戦争責任から逃れたいとする Berlin の潜在的欲望を体現するアニマ的存在と捉えることができる。彼女は戦場とはかけ離れた自由と愛と平和の象徴の地パリで Berlin と幸福な生活を送ることを強く望んでおり、兵士としての責務と戦争からの逃避願望との狭間で揺れる Berlin に対してパリ旅行を放棄させない

ように促し続ける。従って、O'Brien 作品に繰り返し出てくる「ジレンマ」のモチーフ、そしてこの「ジレンマ」とは不可分である自我分裂の問題は、本作品ではパリの旅における Berlin と Sarkin という娘との複雑な関わり合いの中に投影される。「ジレンマ」における Berlin の究極の葛藤は、彼がパリ平和会議のパロディーとして空想世界の中に急遽作り出した、Sarkin との討論の場において最も明確に提示される。パリ旅行を破棄し、兵士としての責務を全うするために戦場に戻ることを改めて決意する Berlin に対して、娘は必死に彼を翻弄するよう、諭すのである。両者の意見の相違は、個人主義的自由と、集団が追求する幸福の上に成り立つ自由という、互いに相容れることのない理念の衝突を想起させる。

こうして、Berlin は娘と決別し、パリへの空想の旅を放棄して戦場の現実に意識を向けるようになる。本論文は、*If I Die in a Combat Zone* において否定的に捉えられていた、不正義の戦争に従軍するという選択が、本作品では一転して正当化されているという点に注目する。Berlin がパリ平和会議を模した公の場で Sarkin と意見を戦わせるというシチュエーションもまた、不正義の戦争を拒絶するもう一人の自分への対峙として捉えることができる。また、本作品が、ヴェトナム戦争再評価の時代である 80 年代を目前とした 70 年代後半に出版されたことを鑑みるに、作品の結末は、戦争に対する当時の煩悶するアメリカ大衆心理を示唆しているとみることも可能であろう。

最終章は *The Things They Carried* を取り扱う。O'Brien は 70 年代から 80 年代にかけて、ヴェトナム戦争表象において様々な試みを短編小説の形式で残しているが、それらをオムニバス形式で集約した *The Things They Carried* は、「ヴェトナム」のトラウマに対処するための新たな展望を読者に提示する作品となっている。既述の *If I Die in a Combat Zone* の主人公 O'Brien、あるいは *Going After Cacciato* の Berlin が善と悪を基盤とする二元論的な観念を用いて自身の戦争体験を意味づけてきたのに対し、本作品の主人公 Tim O'Brien はこの二元論的思慮からは開放されているように思われる。

本作品は、「ヴェトナム」がアメリカにとって「敗北」の記憶であることをようやく心理的に受け入れた作品であると言える。そしてそれは、冷戦期にアメリカ国家が掲げてきた勝者としての肯定的自意識が象徴的に否定されることで示唆される。例えば本作品では、勇敢な兵士達の姿はほとんど描かれることはなく、多くの場合、兵士達は戦地で不条理な死を遂げるか、生還しても心的外傷ストレス障害、いわゆる PTSD に苦しむのである。これらのような、生を全うする意義を見失ってしまった兵士達の姿は、第二次大戦におけるアメリカの勝利に貢献したかつての兵士達の姿とは程遠く、第二次大戦を戦い抜いた兵士達が体現する英雄像を大きく逸脱したものとして描かれる。不正義のヴェトナム戦争を戦い、不名誉を被った兵士達の内的世界に焦点を当てて物語を描き続ける主人公 O'Brien は、アメリカンヒーローを体現することがかなわなかった兵士達の物語を幾分センチメンタルな態度を以て描き直し、読者に提示する。同時に、O'Brien は自身の体験についての告白も含めた、メタフィクショナルな語りで読者を巻き込み、自身の考える「戦争の真実」を主張する。ここで示される、「戦争の真実」とは、第二次大戦の戦勝国としてのアメリカにとってのポジティブなセルフイメージを完全に汚す、不名誉なものとして定義されており、*story-truth* と名付けられた語りの媒体によって表現される。

O'Brien が構築する *story-truth* は、ヴェトナム戦争を戦った語り手と読者とが互いに共感しあうことを可能にさせる言説空間として理解することができるであろう。そして、O'Brien にとっての真実とは、語り手と聞き手の間の精神的交わりを基盤としてこそ、その意義を確立するものなのだ。ヴェトナム戦争の敗北についての語りとは共感という相互作用が可能になる言説空間としての *story-truth* の集大成こそ、本作品であると言える。そして本作品は、ヴェトナム戦争帰還兵との共存を通じ、アメリカの敗北と

いう受け入れがたい事実を共感的に理解するためには、個々の人間がその想像力を駆使することが必要であることを考える契機を提供することで締めくくられている。このことは、本作品がヴェトナム戦争再評価の努力が明白な形を伴って現れてきた 80 年代を経て、冷戦期終結直後に発表されているという事実からも伺い知ることができる。

本論文は、ヴェトナム戦争理解、または戦争文学作品の読解という従来の批評的アプローチを乗り越え、Tim O'Brien が *If I Die in a Combat Zone*、*Going After Cacciato*、そして *The Things They Carried* に至るまでの長期にわたって繰り返し取り扱ってきた主題、「不正義の戦争に行くべきか否かの決断を巡る葛藤のプロセス」の重要性に着眼することで作品を読み直す試みである。葛藤する主人公達の鋭い洞察は、冷戦期アメリカの文化や大衆心理への示唆に富むものである。したがって彼らの視座は、アメリカ社会が「ヴェトナム」の不名誉な出来事の記憶に対し、どのように対峙してきたかを浮かび上がらせている。

第二次大戦以降、アメリカの勝利主義的自我に対する肯定的な意識は著しく際立っていたが、アメリカ軍事史上最も忌まわしいヴェトナム戦争の記憶によってその自意識は大きく揺るぎ始めたと考えられる。「ヴェトナム」の記憶はアメリカ大衆の心にアメリカ人としてのアイデンティティに対する激しい葛藤をもたらすこととなった。本論文で取り扱った O'Brien のヴェトナム戦争三部作における主人公達の葛藤を体系的に読み解くとき、第二次大戦後のアメリカにおけるナショナルアイデンティティの危機と再構築についての葛藤を垣間見ることができるのである。このことは、O'Brien がヴェトナム戦争という史実に基づく限定的な出来事を作品の基盤に据え、かつ、一兵士としての彼の個人的体験を素材として取り扱っているにも関わらず、彼の作品がヴェトナム戦争理解、あるいは戦争文学研究という限られた認識の枠組みを乗り越えていることの証左であるといえる。さらにこのことは、O'Brien 作品が、20 世紀アメリカ文学作品の中でもとりわけ重要な位置を占めていることの理由を雄弁に物語っているのだ。